

青山学院大学地球社会共生学部 2026 年度推薦図書一覧

地球社会共生学部の教員が新入生の皆さんにお勧めする図書です。入学するまでに、ぜひ一冊でも多く読んでみてください。

『資本主義を乗りこえる』

内山節/著、2021 年、農文協

本書は、現代資本主義の限界と、その克服に向けた道筋を論じます。著者が批判するのは、人々の実生活から遊離し、貨幣が自己増殖する「荒廃した」資本主義です。このシステムは、感情を持つ人間でさえも利潤最大化のために効率的に動く「労働力という名の商品」へと変質させてしまう側面を持ちます。しかし、人々はこの非人間的な仕組みに違和感や嫌悪感を抱き、「ほどほどの市場経済を模索する動き」が顕在化しています。これは、市場メカニズム自体は活用しつつも、利己的な利潤至上主義の原理には従わない、新しい経済への志向です。単なる利潤追求とは異なる生き方を選ぶ人々が増え、それは利他の思想を基盤とした伝統回帰の動きとしても解釈されます。

本書は、地域社会や共同体といった小さな枠組みで個人と社会の関係を再構築し、そこから「共生」の哲学をグローバルに広めることが、資本主義を乗り越える鍵であることを示唆してくれます。地球社会の共生を考える上で、重要な視点を提供します。

—藍澤淑雄（開発学・開発社会学）

『名画を見る眼Ⅰ』

高階秀爾/著、2023 年、岩波新書

予備知識を持たずに絵画の前に立ち、初見での印象を記憶にとどめるのも、一つの鑑賞法ではある。しかし、初見では色彩の美しさなどは見えても、作品に込められたメッセージを受け取るのは難しい。

「名画を見る眼Ⅰ」は、日本における西洋絵画の第一人者である高階秀爾氏が 15 の絵画を分かりやすく、深く解説する。

例えば、フェルメールの「絵画芸術」。少女がトランペットを持っている。「名画を見る眼」を読んで私に初めて「見えた」のは、トランペットは「栄光が鳴り響く」という象徴であること。15 の作品で同様に多くの秘密が明かされる。

「学ぶことで何かが初めて見える」のは、広く学間に通じる。高階氏も「先人たちの研究に教えられて、同じ絵を見てもそれまで見えなかつたものが忽然として見えて来るようになり、眼を洗われる思いをしたことが何度もある」という。皆さんも眼を洗われる思いを重ねてほしい。

—池畠修平（メディア論・国際関係論）

『人類の起源 古代 DNA が語るホモ・サピエンスの「大いなる旅」』

篠田謙一/著、2022 年、中公新書

本書は、近年発達の著しい、DNA やゲノム解析の技術によってもたらされた、最新の古代 DNA 研究の成果に基づいて、人類の起源、進化史、人類の祖先、そして初期サピエンス集団の形成と世界各地への展開、日本列島集団の起源等を紹介している。

本書を読めば、ホモ・サピエンスは、それに先だって形成された他の人類種（ネアンデルタールやデニソワ人）と同時期に存在し、複雑に交配しながら形成されていることや、人類種の「出アフリカ」以降の、多様で複雑な移動ルート、また日本列島集団を形成した縄文人の中にも多様な集団があったことなどがわかる。分析手法の変化を誠実に記しながら書き進めているが、読んでいると遙か遠い過去が目の前に浮かび、いろいろな想像をかきたててくれる。「終章」では、この分野がもたらす新たな理解が、社会について何を考えさせることにつながるのかについての示唆があり、ぜひ一読してほしい。

『他者の靴を履く アナーキック・エンパシーのすすめ』

ブレイディみかこ/著、2024年（原著は2021年）、文春文庫

英国在住のライターによる「エンパシー」論。この本が広く受け入れられたのは、エンパシーが日本語で「共感」と訳されてしまうと、「共感」ではない他者理解があるのではというもやもや感があるところに、エンパシー＝「他者の靴を履く」という表現がしっくりきたのではと著者は述べる。しかし理由はそれだけではない。著者は一般的に社会の中ではエンパシーの「対象」とされるような職業や立場も経験し、かつ日本と英国を比較の観点からとらえるという、視点の多様性、柔軟性を有している。また、「エンパシーはダメ」論にも「エンパシーだいじ」論にも与せず、いかなる状況においてエンパシーが「闇落ち」しうるかなども軽快かつ冷静に分析している。これにより読者はエンパシーの評価ではなく、それを考える豊かな入口に誘われる。この中でよく引用されている人類学者のデヴィッド・グレーバーの著作なども読んでみると、さらに視界が広がるかもしれない。

—岡本真佐子（文化人類学・文化政策）

『会話の0.2秒を言語学する』

水野太貴/著、2025年、新潮社

筆者の水野太貴さんは会社員の傍ら、YouTubeで40万人近いフォロワーを持つ「ゆる言語学ラジオ」を運営するYouTuberだ。このラジオは「言葉」の不思議をエンターテイメント的に語るのだが、今回推薦する本書は、その軽快さを残しつつより学問的に日常会話を分析して知的好奇心を大いに刺激してくれる。私たちは普段、会話をする際、脳内で何が起きているのか、あるいは一瞬の会話の沈黙はどのような意味を持つのかを考える機会は少ない。本書はそうした「見えない領域」を言語学の視点から読み解こうと試みる。学問はまず知識を理解・記憶してから応用するものだと思われがちだが、この本を読むと、むしろ身近な疑問や興味から応用が始まり、そこから体系的な学びに広がることが実感できる。大学生活を始める新入生にとって、学問と日常がつながる体験を与えてくれる格好の一冊である。自分の何気ない会話を振り返るだけでも、学問的な発見があることに気づかされるだろう。

—菊池尚代（言語学・教育学・メディア）

『世界史上』、『世界史下』

ウィリアム・H・マクニール/著、増田義郎、佐々木昭夫/訳、2008年、中公文庫

国際関係論を学ぶにあたり、世界史の知識は必須です。高校までに学んだ世界史の知識をさらに広め、深めるにあたり、マクニールの『世界史』は、適しています。

マクニールの文明史を中心とした俯瞰的な視点は、様々な事象の地域的、そして歴史的連関の有機的な理解を高めてくれます。地理、宗教、芸術さらに人間性をも考察に入れた生き生きとした歴史叙述からは、権力や権威の興亡は勿論のこと、人類の生きてきた証としての世界史を実に豊かに学ぶことができます。

本書は、関連地図、写真や年表を多く紹介していますが、より良く勉強するために、世界史地図なども手元に置きながら読み進めると、さらに分かりやすくなるでしょう。通読することをお勧めしますが、関心のある地域、テーマ、時代の章から読んでみるのもよいでしょう。これまでの世界史の勉強で理解が難しかった時代、事象から読んでみることもよいでしょう。

『私の個人主義』

夏目漱石/著、1978年、講談社学術文庫

これは、夏目漱石が晩年、学習院の学生に行った講演です。自己の進むべき道の発見、他に追従しない自分なりの考え方の確立に到るまでの自己の煩悶、糺余曲折の過程を率直に語り、そして英国留学中に目覚めた自己本位の考え方を紹介しています。

漱石は、自己本位とは、自分の個性を発展させる拠点の確立であると説き、さらに自己本位は、他人の個性の尊重であり、社会に対する義務、責任を伴うものであることも強調しています。そして自己本位が、自分の個性に由来するゆえにもたらす自信と幸福について説いています。漱石は、迷いがあっても自己本位に到達するまで勇猛に徹底的に突き進むことの重要性を説いています。

地球社会、日本のために役に立ちたいという情熱を、学問的職業的方向や方法に繋げるには、様々な葛藤や困難もあるかと思います。この講演は、学問、仕事、そして生き方の確立において、各人にとて勇気とインスピレーションの源泉となるでしょう。

—熊谷奈緒子（国際関係論）

『江戸のお金の物語』

鈴木浩三/著、2011年、新潮文庫、日経プレミアシリーズ

普段、皆さんのが何気なく使っている「お金」。実は、日本では江戸時代にすでに高度な貨幣経済が進んでいました。江戸時代は、金、銀、銭がお金として使われており、それぞれの価値が違っていたので、交換比率（つまり、今でいう為替レート）が定められていました。しかも、この交換比率はいつも変化していたとのこと。そう、現在の変動為替レート制と同じです！本書の著者は、「江戸時代に培われたお金の使い方・使われ方を含む資本主義的な土壤の上に、明治の発展があつて、それが現代の日本に脈々とつながっている」（p. 240）と述べています。第二次世界大戦後、日本が急速に経済発展を実現できたのは、江戸時代に高度な金融の仕組みが根付いていたことと深い関係がありそうです。江戸時代にタイムスリップして、お金の観点から日本史をのぞいてみませんか。

—中川利香（金融論、開発経済学、アジア経済論）

『深夜特急〈文字拡大増補新版〉（全6巻）』

沢木耕太郎/著、2020年、新潮社

学生時代に私が東南アジアを放浪するきっかけとなった、いわゆるバックパッカーのバイブル

ルとして語り継がれる偉大なる名著です。「インドのデリーからイギリスのロンドンまで乗り合いバスで行く。」主人公はなぜこの様な旅を行おうと思ったのか。道中で何が起こったのか。そして見事ゴールできたのか。読んでからのお楽しみです。特に東アジア地域を旅する第1巻及び第2巻がオススメです。ただし、一度読み出すと（主人公と一緒に2万キロの旅へ出発すると）止まりませんので、そこだけが要注意です。

—林拓也（経済史・経営史）

『平和主義とは何か』

松元雅和/著、2013年、中公新書

人類の歴史は戦いと共にある。21世紀は9.11のテロと共に始まった。そして排他的ナショナリズムは高まるばかりである。しかし地球社会において人々が共生していくためには平和的な関係が必要である。

日本は第二次世界大戦以降今日まで、平和主義を非常に重んじながら歩んできた。青山学院大学は日本を代表するキリスト教大学であるが、日本のキリスト教界は更に強く平和主義を主張している。しかし平和主義とは何なのか、またどのような種類の平和主義があるのかについてはよく理解できていないことが多い。

本書は、平和主義とは何か、また平和主義に対峙する正戦論と現実主義を広く類型化、検討し、わかりやすく整理している。平和主義も正戦論もキリスト教にそのルーツがあるのであるが、著者はそのこともよく押さえてかなりフェアな紹介をしている。平和的共存を考えるために一読を勧めたい。

—藤原淳賀（キリスト教社会倫理）

『Never Lost Again グーグルマップ誕生』

ビル・キルディ/著、大熊希美/訳、2018年、TAC出版

Pokémon GO を生み出したジョン・ハンケがこの本の主人公。なぜ彼が Google Earth を作り、Google Maps を作り、そしてあっさりと Google を辞めて位置情報ゲームを軸に新たな世界を作り出そうとしたのか、今まであまり表に出てこなかった2000年前後のウェブ地図と地理情報システムを巡る様々な攻防と変遷、そしてジョンが目指す未来が本書には赤裸々に語られています。著者でもありジョンのビジネスパートナーでもあるビル・キルディが Google から Niantic 社に移籍した後だからこそ、Google 内部で起きた当時の権力争いが淡々と記されており、ノンフィクション作品として読み応えのある一冊です。

—古橋大地（地理空間情報科学・地図学・リモートセンシング）

『国際協力入門—平和な世界のつくりかた』

山田満/著、2024年、玉川大学出版部

『国際協力入門—平和な世界のつくりかた』は、ニュースで耳にする「国際協力」をぐっと身近に感じさせてくれる一冊です。国際協力と聞くと、政府や国際機関が行う大がかりな活動を思い浮かべるかもしれません。しかし本書では、開発途上国の暮らしや人々の思いに寄り添いながらたち一人ひとりの生活と世界の課題がどのようにつながっているかを、わかりやすく示してくれます。たとえば、食べ物や服、スマホに使われる資源の多くは海外から来ており、

その背景には貧困や環境問題が隠れています。この本を読むと、世界の出来事が遠い国の話ではなく、自分の日常とつながっていることに気づかされます。そして、将来どんな生き方を選ぶにしても、「平和な世界をどうつくるか」を考えることは必ず意味を持つと感じられるでしょう。高校生の皆さん、自分の未来と世界を同時に見つめ直すきっかけになる本です。

一堀江正伸（国際関係論・人文地理学）

『世界を救う 7人の日本人－国際貢献の教科書』

池上彰/著、2010年、朝日文庫

本書は、水、母子保健、食料生産、基礎教育、産業振興等の分野で世界で活躍するプロフェッショナル 8 名の言葉を通して、途上国における援助の実際、日本の援助のアプローチを教えてくれる。一般に援助について尋ねると、相手国の人々に資金を渡すだけではだめ、あるいは、施設や設備の供与のみならず、技術や知識を教えるべきなどの感想をもらうことがある。援助の現場ではこれらが当然のことになって久しい。むしろ、プロの現場では、途上国の人々が自分たちが整備した自分たちの設備として当事者意識をもてよう、地元の文化や社会のなかで根付く保健医療サービス、運営ノウハウになるよう、相手側に寄り添う現場主義に徹している。援助することは一方的な「貢献」ではない。日本国内でもますます求められる社会的起業、イノベーションのヒントがある。援助の向こう側にはこれから世界経済を牽引しうる新たな市場がある。私たちが国際協力から学ぶものは多い。

『小さな地球の大きな世界：プラネタリー・バウンダリーと持続可能な開発』

J. ロックストローム・M. クルム/著、武内和彦、石井菜穂子/監修、谷淳也、森秀行ほか/訳、2018年、丸善出版

本書は 2015 年に出版された Big World, Small Planet: Abundance Within Planetary Boundaries の翻訳です。昨今、さまざまなメディアで SDGs という言葉を目にする機会が多いと思います。SDGs とは 2015 年に国連で採択された持続可能な開発目標のことです。持続可能な開発の考え方を理解する上で、本書で提示されているプラネタリー・バウンダリー、つまり地球の限界という考え方はとても重要です。本書では、人間活動の急激な拡大が地球システムそのものを脅かしているということ、私たちが将来の世代にわたって成長と発展を続けていくためには、地球システムの機能を大切にする新しい発展の枠組みが必要となっていることなどが述べられています。少し理解が難しいかもしれません、本書の科学的数据や美しい写真を眺めながら、将来の世界のあり方について考えてみてください。

一升本潔（国際協力・持続可能な開発）

『直感・共感・官能のアーティスト思考』

松永 エリック・匡史/著、2024年、事業構想大学院大学出版部

「直感・共感・官能のアーティスト思考」は、単なるアート鑑賞ではなく、アーティストの創造性の根源を探求し、その思考法をビジネスに活かすための指南書です。従来の論理的な思考だけでなく、直感や共感といった感性を重視することで、画期的なアイデアを生み出す力を養えます。音楽家でもある著者が、長年の経験から得たアーティストならではの視点で、読者に創造性の扉を開きます。本書は、変化の激しい現代社会で、新しい価値を生み出したいと考えるあなたに、多角的な視点と創造性を提供します。アーティストの思考プロセスを理解

し、自分自身の創造性を開花させてみませんか。

—松永 エリック・匡史（国際ビジネス・デジタルイノベーション）

『ヴェニスの商人』

ウィリアム・シェイクスピア/著、福田恒存/訳、1967年、新潮文庫他

市場メカニズムによる経済は、人々が近代的な考え方を持つようになって登場した。とりわけキリスト教における宗教改革の影響が大きいとされる。マックス・ウェーバーによる論考（『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』）が有名だが、文学の世界からもそうした変化を知ることができる。ビジネスにも長けていた文豪シェイクスピアの作品には、それらがよく描かれている。次点としては『リア王』、『から騒ぎ』を推薦したい。

—山下隆之（理論経済学）

『文豪の装丁』

NHK「美の壺」制作班/編、2008年、NHK出版

「本」という言葉からみなさんが思い浮かべるものはなんでしょうか？学術書から授教科書、趣味で読む小説や情報を得るためにガイドブックとか色々な「本」がありますが、おそらく皆さんのが考えるのは本の「内容」でしょう。しかし、本は内容だけで出来ているわけではありません。本の価値、そして印象を決める大きな要素として大切なのが、装丁（ブックデザイン）です。

明治から昭和初期は、日本の装丁文化が頂点に達した時代もありました。本書では近代日本を代表する夏目漱石の著作を始め、当時の様々な作家や画家たちの、芸術的な装丁や挿絵が、カラーや白黒の写真で紹介されています。装丁を見るだけでも楽しいのですが、その技術や特徴、作家のこだわりを知ることで、その時代背景はもちろんのこと、今まで知らなかつた「本」の世界が広がっていきます。物事を多面的に考えたい人、デザインが与える影響などについて関心がある人におすすめです。

『The First Samurai: The Life and Legend of the Warrior Rebel Taira Masakado』

Karl Friday/著、2007年、John Wiley & Sons

海外で日本のイメージについて語られるとき、よく使われるイメージのひとつが「サムライ」です。アニメや漫画、また野球の日本代表「侍ジャパン」という名称を通じて世界中で人気も認知度も高い存在ですが、はたしてその「サムライ」とは一体どういうもので、どう誕生してきたのでしょうか？

そうした「歴史上の本当の武士」の姿に迫ったのがこの本です。著者のフライデーは英語圏における侍研究の第一人者で、平将門を中心に歴史の実像と虚像の差異や、人物を通しての歴史研究のあり方などを示してくれています。これは典型的なイメージを超えて、世界の現実を学んでいかなくてはならない皆さんにとって、重要な問題でもあります。

英語ということで少々敷居が高いかもしれません、比較的短く、学術英語としてはかなり分かりやすく書かれています。日本の歴史について英語で語れるようになりたい人には、おすすめです。

—亀井ダイチ・アンドリュー（歴史学・日本研究・出版文化）

『科学的思考のレッスン』

戸田山 和久/著、2011年、NHK出版

「理論」とは何か、その良し悪しはどう判断されるのか。仮説と検証とは何を意味するのか。本書は、こうした科学的な思考の基本を初学者にもわかりやすく解説しています。ともすると科学は「信じる」もののように捉えられがちですが、一読すれば「洗練された疑い方」こそが科学の本質だと理解するでしょう。

本書は東日本大震災の起きた2011年に出版され、後半では被曝リスクの理解に触れていました。当時、原発事故をめぐる混乱の中で、著者は冷静な判断のための思考法を提示しようとしたのでしょう。

しかし同様の状況は約10年後のパンデミックでも繰り返されました。科学リテラシーを正しく理解し、自分の頭で考える力を養うことの重要性は今も変わりません。

本書は、科学を「信じる」でも「否定する」でもなく、「理解し、問い合わせ続ける」ための思考の道具として読むことができる一冊です。

—小堀真（社会学）

『トランスナショナル・ジャパン－ポピュラー文化がアジアをひらく』

岩渕功一/著、2016年、岩波現代文庫

文化の越境が日常化する中で、アジア域内においても、1990年代以降ポップカルチャーの存在感と相互浸透が顕著になってきました。本書は、このような状況をふまえた上で、1990年代以降のアジアで消費される日本のポピュラー文化と日本で消費されるアジアのポピュラー文化を多角的に検証しています。国境を超えた相互理解やつながりの構築など、ポップカルチャーの越境がもたらす多くの可能性がある一方で、「他者」としてのアジアの再生産や内向きのナショナリズムとの関係を論じている著者の指摘は、現在の日本で生じている状況に重なり合うものと言えるでしょう。

—齋藤大輔（東南アジア研究・文化人類学・文化社会学）

『日本の構造 50の統計データで読む国の形』

橋木俊詔/著、2021年、講談社現代新書

日本の格差問題の研究で知られる経済学者が、日本の社会と経済について50の項目を選び出し、図表を用いながらわかりやすく解説している。それらの図表では、過去から現在までの推移や他の先進国との比較が示されている。例えば、「第1章 日本経済の健康診断」の中に「労働時間は60年代より約700時間ほど減少-日本人は働きすぎか」という項目がある。そこでは、戦後から2019年までの約70年間にわたる年間労働時間の推移が図示されており、他の先進国の労働時間も数字で示されているため、日本の労働時間がどのように推移してきたか、他国と比べて多いのか少ないのかがわかる。50も項目があるので、その中から自分の興味のあるテーマを見つけて欲しい。そして、実際の統計データと自分の持っている印象が同じか否か確認してみよう。さらに、日本の構造にどのような問題点があるのか、日本の社会や経済をよ

り良くするためには何が必要であるか考えてみよう。

—咲川可央子（経済学）

『くらしのアナキズム』

松村圭一郎/著、2021年、ミシマ社

国家とは何のためにあるのか？本当に必要なのか？皆さんは考えたことはありますか？そもそも地球の隅々まで国境線が引かれ、現在の形での国家が成立したのは歴史上ではごく最近のことです。

この著書は、人類学の視点から国家について考察しています。ただし、本書で触れられているのは無政府状態を目指して革命を起こした歴史上のアナキストたちの思想や運動ではありません。人類学者である筆者が、エチオピアのある部族社会でのフィールドワークを通じて知った、部族の人々が喧嘩や揉め事も、災いや生活の困難も、国の法制度に頼ることなく、自分たちで話し合い、互いに手を差しのべあって解決しようとする日々の営みを書き綴っています。

国家による統治と支配、庇護や分配が当たり前のように受け入れられている今日ですが、我々がどんな世界を生きているのかを問い直すきっかけを与えてくれるかもしれません。

—菅野美佐子（文化人類学・ジェンダー学）

『まなざしの地獄 尽きなく生きることの社会学』

見田 宗介/著、2008年、河出書房新社

本書は、1960年代末の永山則夫連続射殺事件を起点に、社会の階級構造と個人の実存を掘り下げた社会学の古典です。

著者の見田宗介は、19歳の少年の犯行を「個人の悪意」に帰結させません。地方から都市へ出た彼を絶望的な行動へと追い詰めたものは何だったのか。見田が着目するのは、少年を冷徹に排除し続けた都市社会の「まなざし」です。高度経済成長期の日本社会に潜む、ある決定的な構造が、一人の人間を「地獄」へと突き落としていく過程を、本書は鮮やかに描き出します。

大学での学びは、現象を構造的に捉えることから始まります。本書は一人の悲劇を時代全体へと位置づけ直すという、社会学的思考の核心に触ることができます。社会を見る目を根本から変えるこの名著は、深い学びへの確かな土台となるでしょう。

『大衆教育社会のゆくえ：学歴主義と平等神話の戦後史』

苅谷 剛彦/著、1995年、中央公論新社（中公新書）

「努力すれば誰でも成功できる」—その信念は本当でしょうか。

本書は、戦後日本を「大衆教育社会」と名づけ、私たちが当たり前だと思ってきた教育システムに隠された構造を解き明かします。著者の苅谷剛彦が問うるのは、なぜ日本では教育格差が問題として認識されにくいのか、そして「平等」を掲げる教育制度が、なぜかえって格差を生み出してしまうのか、という根本的な問いです。

1995年の刊行時、まだ「格差社会」という言葉すらなかった時代に、本書は2000年代以降に顕在化する教育問題の核心を予見していました。あなたが受けてきた教育、そしてこれから関わる社会を、まったく違う角度から見つめ直すことになる一冊です。その答えは、ぜひ本書の中で確かめてください。

『具体と抽象：世界が変わって見える知性のしくみ』

細谷 功/著、2014年、dZERO

本書が明かすのは、複雑な問題を解決できる人とは、具体的な情報の中で溺れず、そこから本質や法則を抜き出す「抽象化」の力に長けている、という洞察です。

著者の細谷功は、「具体と抽象を往復する力」こそが、問題解決にも、コミュニケーションにも、そして知的創造性にも不可欠だと論じます。会議で議論が噛み合わないのも、ある分野の知識が別の分野で活かせないのも、すべて「抽象度のズレ」で説明できるのです。

AI が膨大な具体的情報を処理する時代だからこそ、そこから本質を見抜き、新たな文脈へ応用する「抽象化」は、人間独自の知性として一層重要になります。目の前の枝葉に惑わされず問題の幹を見抜くこの思考法は、大学での学びを深める強力な武器となるでしょう。

—塚田祐介（社会学・社会階層論）